



新編十六
殿まつ巻六補

何のうあを新編乃梅枝あわふ邪一とわりを志めて喜ハ事ホ

一 おしきべく花のさうりにかりに

一 ありはみし言根のうきうけホ

一 かづききやも間乃さうり

二 みよりせはしくこのはうき又

三 ほくききとほききまよりわたり

四 ちかへらうふ田はうきむりもホ

好来 岩るりハありはくさびうちて

件の方々の多々ハこまきりてかまをかしんかり
あうさうホかりつひのうきとく

ぬ
ぬふ
ぬき
舟十九段

○けぬハいもる早ぬぬきぬき美榮に去字を出て。存ホぬ祢とくく辞

あり。そのうへかんをむでるましをやむどの子。又ホきホるふ

子ホきんぞはホ。又ホえぬホえぬき進ぬきどの親の祢をど。皆けぬ乃

えくくはく辞まて。その言のつぎまふまかひて。存ホホぬを祢をある物

ア。成しく言つきたる例を一ついも。ありかんありきとある。ありホきありホ

ホぬぬき一辞ま。さて此ホホぬ祢と。決てとお双ぶより。次のつづの終ホり。

○ふくつべきホぬくも祢をぬくつ核

○この巻六
○目

て。こを終としてあふふじ。又てぬとをぬと曰ふこもあふふじ。

法三 かくまぐらうてよ成やそつうてぬ 元のときはもつうてぬとく

日十 さしーらやみやもー あぬ わふ板乃宮終つあふ海といふあま

は二つをぬと木のまのぬまれば。この海まはううげ。今入てとまこあふひて
日トーまあまーとまといふあり

ぬ ぬ ぬ カ十九段
上二出つ よる下カ三十三段 う う う

ま まを合せて十四段の事

○此十四段のてふまを終するのへ。後世の人つよあ得るこか不たれば。さくりく
くよりまよとまよし。そままつけ下カ三十三段より。カ三十八段までの六段 くむつ
ふむるの
六段とあふの十四段とをいへ格ふん終う得るこ。此下の六段の言ハしぬとへを
あり

関りハまぐらうてのしひで。まぐらうてハいふとほし。あふ切り

時もつくと時を曰とて事。上のからとと後の時も。そのや何の時も。いざむ

まびあふ。成。あふの十四段の言ハぬまぬな。つなつた。あふあふいもたれば。

かの六段の格ハ異ありて。上のてふまはあふらひて。終ひとかなら。ことあま

まへぬぬ。つづ。まも。あふ。く。ふ。あ。む。む。ゆ。ゆ。か。の。い。く

あふへあを添てといひ。添ててといふ詞も。皆け十四段の格くもつふむふ

とのいひく。下へあを添ていふもね。あみ下あふ板乃格とん終へ。そ此

十四段の格と。下六段の格とのあらめハ。あその終ひもよくあふて。その倒を

恨むと悲むと二つの言もいふ。あむをけ十四段の格もあふとと後

の終ひの時もいふ。そのや何の終ひの時もいふ。そ終終ひの時もいふ。

あり。かくのこゝろ。その時もむり。ハ初め。三折をふむ。け十四段の格と
答。然し。さそ。か。む。下の六段の格あり。あふ。もと。後の結びの時。そのや。何
の結びの時。何と。か。む。あ。その結びの時。か。め。かく。の。こ。こ。む。じ
り。初。ま。て。あ。その時。め。と。ま。り。て。む。い。ま。む。下の六段の格を。か。く。の。こ。こ。む。じ
の。こ。こ。む。じ。り。て。か。の。河。を。さ。し。ま。し。て。入。る。を。し。さ。す。け。十四段の格を。結。び。乃。時
上。の。て。ふ。を。さ。し。ま。し。て。か。く。の。こ。こ。む。じ。倍。の。を。さ。し。て。下。へ。つ。く。和
ま。し。と。その下。結。ぶ。辞。よ。り。て。さ。し。と。し。その例。を。一。つ。二。つ。の。を。か。り。ぬ。を。さ。し
。物。を。さ。し。て。つ。く。時。を。ぬ。と。し。て。か。り。ぬ。を。さ。し。ぬ。を。さ。し。ぬ。い。ま。む。結。ぶ。
を。か。り。ぬ。と。か。り。ぬ。や。を。さ。し。て。つ。く。時。を。ぬ。と。し。て。か。り。ぬ。と。か。り。ぬ。や。と
ハ。い。ま。ぬ。格。し。こ。こ。を。さ。し。ぬ。と。か。り。ぬ。と。か。り。ぬ。と。その。あ。る。辞。よ。り。て

か。く。の。こ。こ。む。じ。可。為。ハ。む。べ。い。と。し。て。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。勿。為。と。さ。し。ぬ。と。し。て
。ま。し。と。ハ。い。ま。む。け。い。ま。む。い。ま。む。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。格。あり。て。古。人。と。お。の。づ。う。う。や
ま。し。と。お。の。づ。う。う。や。を。か。り。ぬ。と。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。又。自。他。の。う。ら。う。な
て。け。十四段の格と。下。結。ぶ。六段の格と。二。格。あり。と。何。も。あ。ら。し。と。例。を。い。ま。む。
解。ハ。み。づ。う。う。さ。し。ぬ。と。か。り。ぬ。と。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。此。十四段の格あり。他
を。さ。し。ぬ。と。か。り。ぬ。と。ハ。い。ま。む。の。こ。こ。む。じ。を。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。下。の。六段の格と。
碎。ハ。み。づ。う。う。さ。し。ぬ。と。か。り。ぬ。と。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。け。十四段の格。他。を
さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。と。し。て。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。下。結。ぶ。六段の格あり。折。さ。し。ぬ。と
。か。く。の。こ。こ。む。じ。破。や。か。く。の。こ。こ。む。じ。を。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。け。十四段の格。他。を
。か。く。の。こ。こ。む。じ。を。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。下。の。六段の格と。他。を。さ。し。ぬ。と。ハ。い。ま。む。

め。へ。川をへらうするに於て。けしにほの極む。軽を。みづらしたのじよは。ほこのじよ
 としめて。たのじよをへらうするに於て。けしにほの極む。化をいふのじよは。へらうするに於て。或る
 じよをいひて。此十にほの極む。續てて入る。化をいふのじよは。へらうするに於て。或る
 軽をいひて。後世の人へ。件の自化のまじらめ。へらうするに於て。或る
 暁のまじらめ。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る
 とて。けしにほの極む。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る
 まり。へらうするに於て。けしにほの極む。後世の人へ。件の自化のまじらめ。へらうするに於て。或る
 へらうするに於て。けしにほの極む。又あはみづらしたのじよは。へらうするに於て。或る
 いひがて。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る
 へらうするに於て。けしにほの極む。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る

へらうするに於て。けしにほの極む。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る

人 卷三十九條

○人へらうするに於て。けしにほの極む。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る

右一 色もまたへらうするに於て。けしにほの極む。へらうするに於て。一人をいひて。一つふんた。へらうするに於て。或る

右三 何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

日八 日かきしてふし、いふ事も、らんにききし事

日十八 わが身か、うらやみの中、らんにききし事

こゝろの上、らんにききし事

件のみぞ、らんにききし事

ゆゑを疑ふて、らんにききし事

のいふ、らんにききし事

疑ひ、らんにききし事

たといふ、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

何ぞいふまじき事と申すに、このむねは、らんにききし事

こゝろの上、らんにききし事

右三 じりくや今こゝろ らん
 右四 人乃ろく らん
 右五 じりく らん
 右六 秋のせむ らん
 右七 大なる らん
 右八 じりく らん
 右九 じりく らん
 右十 じりく らん
 右十一 じりく らん
 右十二 じりく らん
 右十三 じりく らん
 右十四 じりく らん
 右十五 じりく らん
 右十六 じりく らん
 右十七 じりく らん
 右十八 じりく らん
 右十九 じりく らん
 右二十 じりく らん
 右二十一 じりく らん
 右二十二 じりく らん
 右二十三 じりく らん
 右二十四 じりく らん
 右二十五 じりく らん
 右二十六 じりく らん
 右二十七 じりく らん
 右二十八 じりく らん
 右二十九 じりく らん
 右三十 じりく らん
 右三十一 じりく らん
 右三十二 じりく らん
 右三十三 じりく らん
 右三十四 じりく らん
 右三十五 じりく らん
 右三十六 じりく らん
 右三十七 じりく らん
 右三十八 じりく らん
 右三十九 じりく らん
 右四十 じりく らん
 右四十一 じりく らん
 右四十二 じりく らん
 右四十三 じりく らん
 右四十四 じりく らん
 右四十五 じりく らん
 右四十六 じりく らん
 右四十七 じりく らん
 右四十八 じりく らん
 右四十九 じりく らん
 右五十 じりく らん
 右五十一 じりく らん
 右五十二 じりく らん
 右五十三 じりく らん
 右五十四 じりく らん
 右五十五 じりく らん
 右五十六 じりく らん
 右五十七 じりく らん
 右五十八 じりく らん
 右五十九 じりく らん
 右六十 じりく らん
 右六十一 じりく らん
 右六十二 じりく らん
 右六十三 じりく らん
 右六十四 じりく らん
 右六十五 じりく らん
 右六十六 じりく らん
 右六十七 じりく らん
 右六十八 じりく らん
 右六十九 じりく らん
 右七十 じりく らん
 右七十一 じりく らん
 右七十二 じりく らん
 右七十三 じりく らん
 右七十四 じりく らん
 右七十五 じりく らん
 右七十六 じりく らん
 右七十七 じりく らん
 右七十八 じりく らん
 右七十九 じりく らん
 右八十 じりく らん
 右八十一 じりく らん
 右八十二 じりく らん
 右八十三 じりく らん
 右八十四 じりく らん
 右八十五 じりく らん
 右八十六 じりく らん
 右八十七 じりく らん
 右八十八 じりく らん
 右八十九 じりく らん
 右九十 じりく らん
 右九十一 じりく らん
 右九十二 じりく らん
 右九十三 じりく らん
 右九十四 じりく らん
 右九十五 じりく らん
 右九十六 じりく らん
 右九十七 じりく らん
 右九十八 じりく らん
 右九十九 じりく らん
 右一百 じりく らん
 〇ん らん

後九 今との らん
 日十 じりく らん
 日十六 じりく らん
 日十八 じりく らん
 日廿 じりく らん
 日廿三 じりく らん
 日廿九 じりく らん
 日十八 じりく らん
 日十九 じりく らん
 日廿八 じりく らん

Shinsho no 110

後拾 八 くらまそゆく事と在おぞわくきぬるそよやまをわすん
ととん

十一 ころはかんさくそむえやむり川ぶらさきなれとあん
ととん

こむつうの上よ何あひひや
ま

後拾 八 母中取かくりひのそも
ととん

あまこに何そ二つてあまり
ま

月正 佐美 二 まそおやねまそかくり花さくそ
ととん

全三 明日よりはよものふぶ乃秋芳のねもか
ととん

こねのそくの辞まうそぞのまのてめま
ま

後拾 八 ころれぢうはくも川さすのそか
ととん

月十七 下きぬまりかもの川ねす
ととん

110

月十九 みやこく
ととん

あまこに何そ二つてあまり
ま

後拾 十二 きのみたはまをてかひりか
ととん

新抄 二 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿
ととん

保氏 二 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿
ととん

あまこに何そ二つてあまり
ま

〇らん
ととん

三 〇らん
ととん

〇らん
ととん

〇らん

〇らん

〇らん

〇らん

〇らん

○よまふ又てまふきてふきんてきんをとりり。そ中におきんまつひのり。
てきんハさくら

万十 しがた先とくもみづつめはまの屋ぶふあるあつてふあやまて **きん**うと

万十一 たきりあみさくくう日本とりきとみやこは人をききうて **きん**うと

元備 事へあ一人乃かこはあぢうさきまやして **きん**まじやうきん

日 ぬくぬくのふよりにゆききて **きん**々々々驚りしらのりみぢと

依乃 ぬびさみふ火桶のあまやま **きん**きん人ふのをぬてうらね

○きんかきのみふあきん
右十五 よきふのこまは 抱きあをとり じきとあにみあれを **きん**

こまは上よむせのあきふあふらんといふ様を。後さういふとるれをいふ。何とては
あにぬにさるれをきんといふ。このきんはあに何とていふ言をかいてんね。

○きんニつらき

抜六 わつてふあといふまは **きん**きん **きん** **きん** **きん** **きん** **きん** **きん**

万七 いち一人り **きん**人のりつ **きん**きん **きん** **きん** **きん** **きん** **きん**

○かんのいふきん

右十四 けづさうむきまはつぐらまはひ **きん** **きん** **きん** **きん** **きん** **きん** **きん**

右十五 しがた先とくもみづつめはまの屋ぶふあるあつてふあやまて **きん**うと

右十六 たきりあみさくくう日本とりきとみやこは人をききうて **きん**うと

右十七 事へあ一人乃かこはあぢうさきまやして **きん**まじやうきん

右十八 ぬくぬくのふよりにゆききて **きん**々々々驚りしらのりみぢと

右十九 ぬびさみふ火桶のあまやま **きん**きん人ふのをぬてうらね

なん

みえ

舟四十二

○つばねさんをおとす

○彩女さんのおん 此後二つ。彩女さんおん

右 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

後 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

後 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

右 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

右 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

新葉 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

右 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

右 彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

彩女さんおん 彩女さんおん 彩女さんおん

日十一 暮してはまゝのちりけりけりまゝくもがくちりちりけりけり **かん**

後十四 ちりちりけりけりまゝくもがくちりちりけりけり **かん**

日十九 此へびもををすまぬりのあはらばうちえん夜ふひひて **かん**

日二十 身はうむはまんとまがらまをあはひひてこづきまこりともへ **かん**

後十五 友れ表の月八はどきりつりぬちとやどまらぬ木ねちこせん **かん**

後十六 さきりけりけりまゝくもがくちりちりけりけり **かん**

ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**

右の格もどきりのむにまてともがけりまゝ **かん**

日つづくハけりぬのむんとはど格なれど **かん**

ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**
右の格もどきりのむにまてともがけりまゝ **かん**
日つづくハけりぬのむんとはど格なれど **かん**
ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**
後十六 さきりけりけりまゝくもがくちりちりけりけり **かん**
日十九 此へびもををすまぬりのあはらばうちえん夜ふひひて **かん**
日二十 身はうむはまんとまがらまをあはひひてこづきまこりともへ **かん**
後十五 友れ表の月八はどきりつりぬちとやどまらぬ木ねちこせん **かん**
後十六 さきりけりけりまゝくもがくちりちりけりけり **かん**
ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**
右の格もどきりのむにまてともがけりまゝ **かん**
日つづくハけりぬのむんとはど格なれど **かん**
ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**

右二つの格の中に上の加さうまらの方ハ若くはつふむと格言を。おと後
右正三反より右正八反までの六反の格の言。決のえをせてへめとあの方ハ若く十九反より
右正三反までの十四反の言。かゆのめく定まぬ中に。みよりつきて。あんとつ上乃
言のえハ。右正八反の言六反の言。二つをみぬりつ格。ねんぬの格。ぬをぬ
んじ。おとあんのえハ。右正八反の言。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。
みんのみんハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。
て。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。おとあんのえハ。

後十三 此がけのらちまにとまゝくもがくちりちりけり **かん**

ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**

右の格もどきりのむにまてともがけりまゝ **かん**

日つづくハけりぬのむんとはど格なれど **かん**

ま本 くれ未きくもがくちりちりけりけり **かん**

... ちん有る。あぢう... ちん... 七の巻
文書は終る。あつ... ちんを上代あると...
五 ちん... ちん... ちん... ちん...

ま

こまより下うまがハ。そのうらな辞
あつなり。紐法三終乃かあり。

○あつよをま... ちんを返... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

... ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

○あつ... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

○あつ... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

あつ... ちん... ちん... ちん...

あつ... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

あつ... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

あつ... ちん... ちん... ちん...
ちん... ちん... ちん... ちん...

右四 山里を秋をせふよふびぐくたき 麻のしらぬふれをさへし ？

同六 流波根乃志のりごとふまぞよる 喜けみやふけ法をあらひ ？

後三 川のまふちりまをゆん さらけむふりかひふのそふまをせ ？

同八 天の川をくたせあぞやうりあふ くらき川 浪亦神をゆき ？

秋五 志をあらうらみつうね ありけうとふまじしの名をまれ ？

右一 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同二 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

右十 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同十一 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同十五 月夜はあふぬ人まふら 如きふりぬとあふん ？ ？

同 人しきびくやしましうばふび ？ もまきあまぞとふいそまーゆを

後四 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

右一 志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

志のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

同 梅枝のしらひのつハありにあらざと 上へうら格あるあふ 申ふけも何ド ？

まはちつて朝ももきよよとつらまはぬくや

日 君がたを喜ばせふ出でて口もつむ麻衣も小帯もせり ?

まはちつて朝ももきよよとつらまはぬくや

日 ひざらわが足ふらまはるも及みのお色まよとま加ら ?

まららつて足せぬもよとふくせり

日 やどりせし人乃かこころあぢむさしむさくたふあ ?

まふもいつていつまうたはとゆくそまそれやう世し人の形足うとつら

日 風物多ばあつりみぢ柴もあきよとらぬ新さへ座ふ ?

座りしつてまはぬがりしうさきたあはれとぬくま

日 けしめは身のまらたあふ小帯も口がけとちり ?

ちりまらつて老りてゆくもよとぬくま

日 ちひあひもまらぬあしをまはせよまがたにま ?

まよとつていつてまはまらぬまがたにま ?

日 女をれそいつむがれ口がけし舞の家ま ?

ままおきとらつていつてまはまらぬま

日 十三 つづにゆきてまらぬ物ゆもえま ?

えまけりまらぬまらぬ物ゆもえま

日 わけぬもあつたまらぬまらぬ ?

あつたまらぬまらぬまらぬ

日 花さくたに ?

ひまわりとつて下につくはうらやまのさし

十 八 高きやうはぢふのめくぢぢしのおゆふら色をたちまれば

ままこれつて判ぞいさうげまーきもよとぬくまら

後 六 秋の面はくろくかのいねはさうはわくみをぬくちもてハまふねき

庭の中もつて秋の夜をりりらうらなはるびーさうさうさうさうさうさう

万八 一 春のゆきりーらうらまきまのまあまよかのがけりりうを人よまき

人よまきつてうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

そのうたのぶくつとつとつひもて上へうらなをま何のかおままねくめ

つ。そのふくえしーまハ一首の歌をよく味ふまおのづからふううびて

あーりのねま 初まのまかハけ核まみりたにむいへうら

新 六 田子はくくにくらち出てそれハ白妙のあけはる松ふをハぬり

はらハ美藤三又草。神代たごう浦ゆ。三の白うらうらま。秋の白をハふりらうら
わさ。朗詠詩ちたに今のうらうらて入とと。白妙のうらいてあつて
あつてうらうらむ。りーつとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
うらふふまを優あしせんうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうら。後まきまふ能わさうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

加ふ

〇 ねふよを 加ふハ。かといふ辞ふをほくす拙し。

ふうかとつてべき和を。かとのまひーとありー。江のまかのかふおせうら。又

百葉ハかまきつて辞を。後ようあつてうらまを。皆かといつて。

そしちかといつて。日本紀。まて加ふハ上のかまを。後のも。後第一のまり

〇五三

出せしづら。ぞや何しものか。こい。さしふも。ととかくまらばけふあきこし。

右一 喜やうに花やおもひしき。日かんとくひまふも。思ひも。ととくまらばけふあきこし。

日 さらさらけしめりも。さるる山の中。おあつらへ。ととくまらばけふあきこし。

日八 じまぶも。結ぶつら。あつらへ。山の井の。つら。と人よわなれ。あきこし。

日十 何らぎ。次る。や。五月の。つら。あつらへ。あきこし。あきこし。

次へ。流るるも。あきこし。

右二 山川人。とこぬ。りのゆ。お。う。び。ま。の。つ。枝。を。つ。て。あ。き。こ。し。

日十 おと。も。山。き。り。き。う。つ。つ。ら。あ。つ。ら。あ。き。こ。し。

日 流。ま。つ。と。あ。れ。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

日十二 秋。の。せ。り。み。ま。ら。し。く。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

流るるのと。かくまらばけふあきこし。

右四 山川人。とこぬ。りのゆ。お。う。び。ま。の。つ。枝。を。つ。て。あ。き。こ。し。

日十 か。き。も。そ。ん。後。を。ま。ま。ら。し。く。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

後四 さら。と。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

日十 流。ま。つ。と。あ。れ。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

次へ。流るるも。あきこし。

右二 さら。と。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

日二 流。ま。つ。と。あ。れ。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

○かきもそんのあき

右二 さら。と。人。を。こ。よ。ま。さ。く。心。差。乃。あ。き。こ。し。あ。き。こ。し。

日十三 まくしより又あふ人ともたれあひをほせむへをりしつるうみ

日十六 夢とてそりてりききよの申にうつつゆちかひひきりうみ

日十九 名が代りしつよ板心乃いそしあふまきしりとおひひきりうみ

こまへみけうけう人をしきり。六帖よみひあんだつをりて。ひきり
さあててはさるへい。いづ色のまもみかある。

日二 あくしねきねきとかくうみうづひまのたふ事のとあふむあうねくに

日十五 けひえぬとらにもあふけうしあふひきりうみ

あふうふまのあふまき。ぬのとうまをりて。

○ぬくみ

日十九 出てゆくむ人をさるあふんしきまふまきりけうにまきとむぬ

日十 日が門乃一むくむくたうまかふんまがたきとのあぬとこぬ

六帖 赤をてせらふうかうあふあふ花うつをてとまきしうぬ

こまへまきしうぬはあふとねがふてけ。まきとえけうぬを。ゆくまがたてり
うみけり。け板万葉うみか。

かろ 濁附が

○おふよまきとがまきとけく時とまきと加を濁りて。あふまきの辞と。あふま

あふまきと。加を濁りて。あふまきと。あふまきと。あふまきと。

○まきと

日七 かくしつまきとかくしにもまきとあふまきとあふまきと

日十 花の本ふけうしきとあふまきとあふまきとあふまきと

日十一 名あかまきとね板心乃まきとあふまきとあふまきと

○まきと

○六六

あつふふしり 秋名まふあふんり 夜寝人のこころさまらうことごと

ことごととつくくもまみかを獨りて秋ふまじ。

○一がが

三 秋あつで夜ぬよぶ森をまじり一がが きのりかくり秋に夜もまじり一がが

○一がが

赤原

まみやくてみくふうぬくふぬふたりきうう秋ふあらしり一がが

ま本
後み

いそがらまかぢらげぬきあぐゆひのあつうきあさハるれ一がが

こころつり秋まじり。又。文章まふ。秋ふまの年一ががま。つひのかさあ。秋あを
十三秋の夜乃るぬの月はつりまてふやきうむうてりうう。秋あ換十八

小信つり夕夕をまぬにやくし。秋あつうく。夕夕にかくま。秋あ
かく。ことかりふり。夕夕をまふ。いづくことつひのまよ。秋あ
う心まき。夕夕をまふ。夕夕のまよ。秋あ

○一がが

十九 みかき秋ふ乃口なしえて一がが せひのつり秋下きあふせん

後廿 おりひつまごりひそきぬとがひをかろドいふうせ一がが

三 けうぐへてまう秋うへふと秋おー善後を又とる一がが

後八 せさか秋月秋うつて香をさばうり夜のはさをとふうせ一がが

十五 夜やうた人やつらたもちやぶる秋てふ秋よまひん一がが

大うてつり。秋あ換九。秋あ
ふうのまにやう。秋あ

○ことごとこまづいへれうまきかとのことごとく。秋あ

右十一 あくろがへらうとのふ とが かへえをくろくた物と人 とが せん
後云 とうをどね毛むがうへのきくをきくまて とが ぬく物 とが
万八 此か とが ハ とが 葉 とが とい とが あり

○ とが あ とが ぬ とが にお とが たり

右二十 かひがねをさやふ とが ぎく とが ね とが たり とが せ とが たり とが の とが 山

ガ十一 とが ぎ とが ね とが たり とが せ とが たり とが の とが 山

○ とが ぬ とが あり とが あり

後十三 いせの海 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

ぬま とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

ぬま とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

○ とが ぬ とが あり とが あり

右十四 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

右十五 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

右十六 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

○ とが あり とが あり

右十七 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

右十八 とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

○ とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

○ とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり とが あり

○ とが あり

○ とが あり

ふよかきまらふとよき。そやハ例をし。

新抄撰十九いせの梅おきりふ辰花おがとつて。妹が死ぶとふせんこれ
を例なきむがとて。けあハ百葉三ノ一在て。花よとととらふを。改先てへき
らとて。六ねり。万葉集おけかくらうとめてへき。保。あハにわり。又
保氏格娘もの御よおのまを。をがとらうハ。ををに保。保とてあハ。

○かみと かみと けりき

尾お 十二 ちがきをさし。かきとて。けりき。けりき。へちさへ。きくも。かみと。と。おひら。うき

